



Title	「無業の貧民」から「地域エリート」へ：糖業を通して見る清代四川省移住民社会の諸相
Author(s)	岡田, 悠希
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2021, 3, p. 22-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79340
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「無業の貧民」から「地域エリート」へ

—糖業を通して見る清代四川省移住民社会の諸相—

東洋史学 博士前期課程 1 年

岡田 悠希

はじめに

中国では 16 世紀以降に人口増加が進行し、清代に入ると人々は土地を求めて他所へと移動するようになった。なかでも最も人の流入が激しかったのが四川省である。長江上流域に位置する四川省は、明代の末期から清代の初めにかけて度重なる戦乱や災害・疫病によって人口が激減するという事態に陥っていた。清朝政府は荒廃した四川を復興させようと、四川への移住を奨励する政策を取ったところ、すぐに大量の移住者が四川へと押し寄せるようになり、荒廃していた土地はあっという間に開墾されて人口過多となったが、それでも「四川省は土地が広く人が少ない」という噂を聞きつけて移動を試みる人々の流れは止まず、17 世紀後半から始まった人口流入は 18 世紀前半から徐々にピークに達し、ようやくおさまりを見せたのは 19 世紀の初頭だとされている。

移住者の出身地は江西・広東・福建・陝西・貴州・雲南など多様であるが、最も多かったのは長江中流域に位置する湖広からの移住者であった。一般に中国における移住ははじめ男性が単独で訪れ、資金集めを経て無事に土地を購入したのち、故郷の親族を連れて戻ることによって完了する。移住先と故郷との往来は生活が安定するまで何度も繰り返され、先発の移住者によってもたらされた情報を頼りに続けざまに移住が行われていく「移民連鎖 (chain migration)」現象は四川への移住においても同様に見られた。このようにして人口が激減し荒廃してしまっていた四川省では同郷のつながりをもとに移住者達によって新たな社会が形成されていくこととなった。

「無業の貧民」から「地域エリート」へ

すでに述べた通り、移住は土地に対する相対的人口の過剰による耕地の狭小化や喪失を背景とする土地獲得への強い渴望から行われるものであるため、一般に移住者の多くは土地不足に苦しむ社会の下層部に位置する人々だったと考えられている。実際、四川への多くの移住者を析出した中国沿海部に位置する広東では、人口が増えた惠州府に住む多くの「無業の貧民」すなわち土地を持たない貧しい者たちが、四川省へ向かい生計を立てようとしていることが 18 世紀の初頭から問題視されていた。

ところが、清代の中期以降になると、四川においては移住者もしくは移住者を祖先にする者たちの中から、豊かな経済力を背景にして地域で大きな力を持ち、「地域エリー

ト」として台頭する血縁集団が出現する。彼等は知識人でありかつ大地主であったが、保有する紳士身分はそれほど高くはなく、むしろ重視されるのは大土地所有による経済的豊かさであった。彼等は土地や流通過程から得られる利益を経済基盤とし、地域における橋の建設などへの資金提供や困窮者の救済に携わった他、19 世紀後半以降になると地方財政や軍事などにおいて州県行政への発言力を強めていった。

「無業の貧民」であったはずの移住者がいかに驚異的な経済的上昇を果たしたかについては必ずしもクリアに論じられてきたとは言えず、移住者たちが携わった生業についての分析がやや不足していると感じられる。移住者は多様な経済活動を行い、時には出身地から新たな産業を四川省へと持ち込んできた。本報告ではその代表例である甘蔗（サトウキビ）の栽培を取り上げたい。県の中央に長江が横切り甘蔗栽培が盛んであった南溪県という地域においては、18 世紀後半の状況を表した以下のような史料がある。

「土著の多くは山際で田を耕し、新籍の者は多くは川岸で地に種を植えている。種を植える者は、タバコや甘蔗を栽培し、必要な労力は田を耕すよりもやや軽い、利益は田作の倍に値する」（土著之民、多依山耕田、新籍之民、多臨河種地。種地者、栽煙植蔗、力較逸於田、而利或倍之。）

—嘉慶『南溪県志』卷三、疆域志、風俗、農事、第十六葉左～第十七葉右

この史料からは「新籍の者」（移住者）が川岸でタバコや甘蔗を栽培し、稲作を生業とする土著よりも大きな利益を上げていることが読み取れる。この史料は既に多くの論文で引用されており、商品作物であったタバコや甘蔗は移住者に重要な現金収入獲得の機会を与えていたとみて間違いない。甘蔗はその栽培が盛んにおこなわれていた福建や広東からの移住者によって持ち込まれ、同時に 16 世紀に福建で開発された最新の製糖技術が四川省に持ち込まれた。そのため、甘蔗栽培や製糖業に携わった人々は広東や福建からの移住者やその子孫であったと考えられる。

また、甘蔗栽培による現金収入は血縁集団が地域エリートとして台頭していくための経済的基盤にも大きな影響を与えていた。四川省内の糖業が盛んな地域では、住民が甘蔗栽培及びそれに付随する製糖業によって巨万の富を築いたことを示す史料がいくつも存在する。実際、南溪県において 19 世紀中ごろに白糖製造に携わり、巨万の富を得て地域エリートととして地域に貢献した黄正芳という人物の祖先は、広東省嘉應州長楽県から 1767 年に四川省南溪県へと移住した移住者であった。このように、故郷では「無業の貧民」と呼ばれていた移住者の中には、移住先での甘蔗栽培と製糖業によって富を築き上げていくものが一定程度いたのである。

川岸への移住と開発

さて、多くの研究者は最も移住人口が多かった湖広出身者に目を向けがちであり、内陸の四川へと向かった広東・福建出身の移住者に着目する研究は少なく、加えてそうした研究も彼等と糖業の関係性を深く考察したものではない。甘蔗栽培に携わった移住者

の実態と性格をよりミクロな視点からクリアに分析していくことが求められる。

また、甘蔗栽培が行われる川岸の土地への移住は、四川省内の開発とも大きな関わりを持つ。一般に移住者は先に来た者から有利な土地を獲得することができるとされ、四川省では早く来た移住者が豊かな四川平原に入り、出遅れた者は厳しい山岳地帯に入らざるを得なかったと考えられる。山林の開墾は焼畑農法によって進められ、そこではやせた土地でも栽培可能なトウモロコシが生産されて移住民の主食となった。こうした山地開発の担い手となった非定着農民による強引な山地開発は水害の増加をもたらした土著民との対立を深めていったこともあり、山地の開発は従来から注目を集めてきたが、川岸の開発がどのように展開したかについての分析は未だ不十分である。

四川省において最も甘蔗の栽培が盛んであったのは、成都平原を通過して長江へと注ぐ沱江という河の流域であった。成都平原はこの河の無数の細かい支流によっておおわれている。川岸の土地は砂利が混ざった粗い地質であり「壩土」と呼ばれるが、重要なのはこうした土地は稲作に不向きであり、むしろ甘蔗やタバコ、野菜などの生産に向いているという点である。一般に水流の管理も困難で、水害の際には被害を免れない場所であるため、ここに住み着くことを人々はあまり好まない。県内を長江が通過する南溪県における移住者を記した氏族表¹では、1722 年までという比較的早期に移住した湖広出身者 53 人のうち 92%が長江から離れた地域へと移住していた。甘蔗栽培に携わる人々の集団は、稲作を生業とする人々とは別に存在したのである。

甘蔗栽培に携わった人々がなぜこのような土地に入ることを選択したのかについて、ここでいくつかの可能性を提示したい。まず、移住当初の移住者はこうした土地をよりよい条件の土地を購入するための資金集めの足掛かりとして利用していたのではないだろうか。族譜などの史料からは、移住者が川沿いの土地に移住し徐々に広大な後背地を手に入れていく様子が見受けられる。その際、四川省では砂利の混じった開墾に不向きな土地には課税されないとされた 1740 年の詔が関係していた可能性がある。

また、四川省に広東・福建出身者によって甘蔗が持ち込まれたのは清代の初期だとされており、広東・福建出身者の中には清初から四川省に移住してきた者がいた事は確かだが、最もその規模が増したのは他省からの移住者と同様 18 世紀の後半から 19 世紀初頭であった。一方、18 世紀の初頭の史料には、各地の沿江地域における居住者が少ないと述べるものが散見されるため、川岸の開発が本格的に行われたのは、まさしく移住者が増大し土地をめぐる人々の動きも最も活発になっていた 18 世紀半ば以降であったと思われる。これらのことから、川岸の土壌で甘蔗栽培を行っていた人々というのは、広東・福建出身者の中でも比較的遅く移住してきたために、開墾可能な土地を手に入れることが出来ずに川岸に入らなければならなかった人々であったのではないだろうか。

四川省における糖業の担い手が移住した先の土地は確かに先来の者が取得した土地に比べて不利であったが、それでも商品作物である甘蔗栽培及び砂糖生産は、彼等に現金収入獲得による新たな土地購入のための足掛かりを提供していたのである。

砂糖市場・消費の広がり

ここまで甘蔗栽培の実態に着目して論じてきたが、最後に移住者たちの砂糖生産が移住民社会にもたらした変化について論じたい。砂糖は甘蔗から搾り取った汁を煮詰めることによって生産される。移住者によって持ち込まれた最新の甘蔗圧搾機は圧搾過程での効率を上げたほか、持ち運びもできる非常に簡便な作りであったため、少ない資本でも設置可能であった。その新規参入のしやすさから、四川省では各地で製糖業を営む農家が現れ、四川省における砂糖生産は 19 世紀中ごろから 20 世紀初頭にかけて最盛期を迎えた。その結果、四川産砂糖は他省にも移出されるようになり、買い付けのために中国各地から多くの砂糖商人がやってくるようになった。

こうした四川省内での砂糖生産の増加は、砂糖消費量の増大をもたらしたはずである。従来砂糖はその栄養価の高さから薬としての接取にとどまっていたが、糖業の発展に伴い、質の良い白糖の入手に強いこだわりを持った菓子屋が現れるようになった。砂糖生産が最も盛んであった地域では「蜜餞」と呼ばれる果物や野菜の砂糖煮つけが特産品となった。砂糖をふんだんに使用した四川の米菓子は今でも有名である。

ちなみに、20 世紀初頭の中国における一人当たりの年間砂糖消費量は日本側の調査史料などから 1.5kg 程度だとされ、その少なさが引き合いに出されることが多い。当時の中国側の調査²や、四川省内での砂糖生産量が全国の 2/3 を占めていたとする当時の日本側の調査³に基づき四川省における一人当たりの年間砂糖消費量を計算すると、他省への移出分及び外国産砂糖の移入分を鑑みても約 3kg はあったと考えられる。この数値は他国と比べて少ないことには変わりはないが、全国平均と比べると二倍近くの差がある。移住者によってもたらされた甘蔗や製糖技術は四川省において流通・消費の面においても大きな変化をもたらしていたと言えよう。

おわりに

人口過剰という中国全土を巻き込んだ社会問題から生み出された四川省移住民社会は、清朝中国の特質を解明する重大な手がかりをはらんでいる。甘蔗栽培は移住民たちが巧みに生活の安定・上昇を謀っていく手段の一つとして存在し、結果として同郷関係を軸にしたすみ分けが行われた。彼等の盛んな砂糖生産は、砂糖市場の拡大や消費の増大をもたらした。糖業という一つの産業を軸にした移住民や子孫たちの分析は、これまで見落とされてきた移住民社会の一側面の発見につながっているだろう。今後は産業構造内の社会関係や、糖業と他産業との連関についても分析を深めていくこととしたい。

¹ 民国 26(1937)年『南溪県志』巻四、礼俗下、氏族、第四葉左～第七葉右。

² 重慶中国銀行編輯(1934)『四川省之糖』中国銀行総管理処經濟研究室。

³ 河野信治(1922)『支那の糖業』台湾総督官房調査課。